様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月３０日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７１０２２１
研究課題名（和文）　ペリーのアメリカにおける視覚的身体とジェンダー

研究課題名（英文）　Visual Images of Body and Gender in the United States during the Matthew Perry Era

研究代表者
長妻　由里子（NAGATSUMA YURIKO）
高知女子大学・文化学部文化学科・准教授
研究者番号：５０３４７６６３

研究成果の概要:アメリカで1840年から43年にかけて作られたダゲレオタイプ･イメージは、技術的に発展途上であったにもかかわらず、その後のイメージにはない存在感を被写体に感じる。これは、ダゲレオタイプがヴァーチャル・テクノロジーであり、取られる人物が自分を投げかける意識を持っていたからである。1850年代以降、ダゲレオタイプは写真ビジネスとして拡大し、その中で被写体の役割が消失し、ジェンダーを付与されるようになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	500,000	0	500,000
２００７年度	500,000	0	500,000
２００８年度	300,000	90,000	390,000
総　計	1,300,000	90,000	1,390,000

研究分野：ジェンダー
科研費の分科・細目：ジェンダー
キーワード：身体性　アメリカ文化　視覚表象

１．研究開始当初の背景

本研究は、19 世紀写真発明直後から数十年に作られた写真を主な調査対象としているが、この時期のイメージは、古美術作品的に、もしくは歴史的資料として扱われたり、写真史の文脈で技術面での研究が多くなされてきていたが、文化的背景や社会との関連性をもって論じられていない状況であった。

日本では、アメリカの美術研究はあまり積極的に行われていない現状にある。近現代のアメリカ美術研究はあるものの、特に 19 世紀中庸のアメリカについては、文学研究は多く進められていても、写真や図像・絵画など視覚イメージについては、研究されることが少ない。同じ 19 世紀でも、ハドソン・リバー派の絵画が研究は多く見られるが、その前後に広がらないようである。

また、アメリカでも、ダゲレオタイプの古写真研究で社会的背景を含めて論考した優れたものは 1970 年代のものまでで、1980 年以降は、イメージを表層的に紹介する物が多く、その意義を追求するものは少ない。

現在の日本での写真研究は、有名もしくは異端作家による作品を、美術史に置ける意義や主題の解明が主流であり、初期に多い作者不詳の写真や、大量に流通した写真の社会的機能については触れられていない。写真文化の内側に生きる人間の身体が、写真で表象されることで、いかに影響を受け、その結果ジェンダーを形成しているのかについて、研究

することは大変意義深いと感じられた。特に男性の写真史家による研究は、写真の審美的見地や技術面から写真自体を語ることが多く、文化の中でジェンダー形成との関連において写真研究がなされている例が少なかった。国内のフェミニスト的視点からの研究では、ヨーロッパの図像・絵画に焦点がおかれ、家父長制社会の女性表象が行われているが、アメリカのイメージのジェンダー分析はなされていない。

ペリーが来航したことは歴史で誰もが学ぶことであるが、彼の生きた背景についてはあまりよく知られていない。当時が「若いアメリカ」の形成期であったこと、その時期に写真文化が発展したことは、今日の写真文化と日本に対するアメリカの影響を考える上でも重要だと思われ、本研究の動機付けとなった。

２．研究の目的

(1)本研究は、ペリーの時代（19 世紀半ば）のアメリカ社会で、人々がどのような形で身体をとらえ、ジェンダー化されていたのかを明らかにすることを目的としたものである。写真史の研究を行う中で、写真が発明され発展する時期と、「若いアメリカ」が作られていく時期と、ペリーの日本来航・開国の時期が重なることが非常に興味深く、この時期を軸として身体とジェンダーの調査・論考を行いたいと考えた。研究では特にジェンダーを中心として当時の身体表象の調査・分析を行い、人間の身体が写真として大量消費・流通の対象となるなかで、人々の身体認識とジェンダー形成にどのように影響を与え、ジェンダーを帯びた身体が、いかに変化したかについて把握し、そうしたことが、当時の社会イデオロギーとどのように結びついていたのかを明確にする。

将来構想としてはアメリカが日本にもたらした視覚の変容とジェンダー形成と写真の関係も視野に入れるが、交付期間内には、アメリカに焦点を絞り、19 世紀のアメリカの写真発明以前の身体に関わる言説・絵画・図像分析から、身体がどのように認識されていたかを導き出し、それらを 19 世紀から 20 世紀初めにかけての写真における身体表象と比較検証する。

３．研究の方法

(1)アメリカにおける調査

・ジョージ・イーストマン・ハウス写真・フィルム国際博物館（ニュー・ヨーク州）
・ボストン・アセネーアム（マサチューセッツ州）
・マサチューセッツ歴史協会（マサチューセッツ州）

上記施設にて、ダゲレオタイプ、アンブロタイプ、ティンタイプについて、数百点を閲覧し、被写体、服装、髪型、髭、ポーズ、設定、表情、などについて、年代とジェンダーの区分にしたがって、表象の違いについて比較分析した。

また、同機関にて、19 世紀に発行された雑誌を調査し、イラストレーションについて、年代およびジェンダーによる表象の違いについて比較分析した。文献調査も可能な限り行った。

・メトロポリタン美術館（ニューヨーク州）
・ボストン美術館（マサチューセッツ州）
・シカゴ美術館（イリノイ州）

上記美術館を訪れ、展示されているものを参考とし、19 世紀絵画について調査した。

(2)フランスにおける調査

・フランス写真協会（パリ）
・カルナヴァレ美術館（パリ）

上記施設において、フランスのダゲレオタイプを調査し、アメリカのダゲレオタイプとの比較を行った。

(3)文献調査

Harper’s New Monthly Magazine Vol.1～19 を収集し、このイラストレーションについて、①掲載記事や本文の挿絵②女性向け流行ファッション特集頁③風刺漫画、それぞれについて男女の表象の相違を調査した。

ほか、Graham’s Magazine、Godey’s Lady’s Magazine、Phrenological Journal についても、数冊ずつ収集し、同様の調査を行った。

(4) 上記の調査において、調査結果の分析および論考の方向性について、ジョージ・イーストマン・ハウス写真・フィルム国際博物館のグラント・ローマー氏、ボストン・アセネーアムのサリー・ピアス氏、ボストン大学大学院美術史学部のパトリシア・ヒルズ教授に、助言を受け、改善点を直しながら研究を進めた。

４．研究成果

(1)＜19 世紀ダゲレオタイプについて＞

本研究では、19 世紀のアメリカにおけるダゲレオタイプの特質について 1843 年まで

の最初期のものと、その後に作られたイメージについて比較し、考察を行った。

1839 年にフランスで公表された最初の形の写真であるダゲレオタイプは、即座にアメリカに広まった。アメリカでのダゲレオタイプの広まりと需要は、ヨーロッパに比して大変高く、産業としての勢いには明らかな違いが見られた。ヨーロッパではあまり多くなかった肖像の撮影が、アメリカでは9割を超えていた。さらに、1840 年代、特に 40 年から43年の最初の3年間に撮影されたダゲレオタイプ肖像と、それ以降に撮られたものと間には、明らかな違いが見られることが分かった

1840 年から 60 年代へかけて、技術は向上し、撮影機器も改良され、発展するが、イメージ自体は 43 年までの方が印象深いものであることが認められた。40 年代初期の「 存在感」が 50 年代に向かうにつれて弱まるのは、ダゲレオタイプの役割（ダゲレオタイピスト・カメラ・プロセス・人物）のうち、人物の役割が消失していったことが大きな理由にあると分かった。

40 年代から 60 年代にかけて、写真が発展・展開する中で、人々は写真を知り、学び、活用していくが、最初の数年間はこの段階にはなく、「肖像写真」の情報も持ち得ず、その知識に浸されていなかった。

したがって、「どうすれば、どんな結果が得られるか」「どのように写るか」「人からどう見えるか」といった、外側からの判断に向けられる意識は生じていなかったと考えられる。こうした状況だからこそ、40 年代初期のダゲレオタイプのイメージは 50 年代の肖像にある説明的や装飾的なメッセージは発せられず、純粋に「今私はここにいる」という、存在のみが永続し、私たちに訴えることが理解された。

アメリカでは、写真は、1840 年代後半以降、ビジネスとして拡大した。その中で、被写体はかつての主体的役割を失い、皆一様につまらない表情を見せるようになった。時を同じくして、商業写真家で、今日も名を残すような人々が、写真ビジネスとして成功を収める。そうした写真家たちの残した文献の考察から、1850 年代半ばには、肖像とは見るものであり、撮影されることは、すなわち見られる客体になるのだということが明らかとなった。女性は撮影にのぞむ際に、髪型、帽子などの装飾品、服の色や、体型に合わせた服装等々を気にかけ、また、顔の造作をコントロールするべく練習をするようになる。こうした習慣は、写真の最初期には見られなかったことである。

したがって、写真表象の中で、ジェンダーを身につけるようになっていった背景には、ビジネスとしての写真の展開があることが確認された。

この結果の概ねは、日本写真芸術学会、平成 21 年度年次大会研究発表会にて、発表を行った。論文の形になっているので、投稿し、公表を予定している。

(2) ＜ペリーの時代のヴァーチャル・プレゼンス・テクノロジーとしてのダゲレオタイプについて＞

本研究では、ダゲレオタイプが、単なる新しい表象の媒体としてではなく、ヴァーチャル・テクノロジーとしての側面を持っており、特に初期には、人々によって認識されていたことが明らかになった。40 年代から 50 年代のアメリカにおいては、テレグラフ、蒸気機関車、ファクシミリなど、人をある場所から別の場所へと移送する、時空間の制限を越えるテクノロジーが次々と展開した。19 世紀中庸において、人々は、「同時に」偏在する経験を開始する。

ダゲレオタイプは、その材質から、光の反射と屈折である角度では見えなくもなるが、適切な光の下で適切な角度から見れば、像が立体的に浮かび上がる。こうした視覚作用の中で人物のイメージをつくりだすダゲレオタイプは、最初の ヴァーチャル・プレゼンス・テクノロジー であると言えるが、こうした反射・屈折性の中に像を出現させる性質は、アンブロタイプ以降の他のイメージの形態では無くなっていく。

1840 年代初期のダゲレオタイプは、イメージを、ヴァーチャル・プレゼンスとして敏感に感じ取っていた人々が、撮影にのぞむ際に、「今ここにいる私」の存在をカメラ（未来に）に向けて投射することを、自らの役割とできたのではではないか。それ故に、にらみつけるでもなく、威厳とも言えない、純粋でまっすぐな眼差しをむけたと結論づけられる。

こうしたヴァーチャル・プレゼンス・テクノロジーとしての性質は、アメリカ・ルネサンスの作家ナサニエル・ホーソーンが The House of the Seven Gables で描き、詩人ウォルト・ホイットマンによって見いだされ、作品に描かれている。ナサニエル・ホーソーンも、ウォルト・ホイットマンも、写真という文脈では論じられることの多い作家であるが、ヴァーチャル・プレゼンス・テクノロジーとして、再考する可能性があることが、本研究によって新たに分かった。これについては、論文にまとめる予定である。

(3)＜19 世紀アメリカ雑誌におけるジェンダー表象について＞

一般雑誌 Harper’s New Monthly Magazine と女性誌 Godey’s Lady’s Book と Graham’s Magazine を主に分析し、女性表象について考察した。

アメリカにおいて雑誌および新聞が流通

し始めたのも、1800年代半ばであると言える。特に挿絵入りの出版物では、年を追うごとに挿絵の収録数が多くなることが分かった。

女性誌においては、「愛らしい」女性が、柔らかな曲線で描かれるのに対し、Harper’s New Monthly Magazineでは、いわゆる従来の「女性的」な女性と、1840年代の女権拡張運動の流れから現れた新しいタイプの女性の2種類が描き分けられていることが分かった。

従来の女性像は女性誌のそれとあまり変化がなく、雑誌本文の挿絵としてか、巻末の女性向け流行ファッション特集頁に描かれている。新しいタイプの女性は従来の「男性性」を持つ存在として滑稽に扱われ、風刺漫画のなかに描かれている。こうした新種の女性像は、髪型、体型、服装、眼鏡、行動の点で共通しており、雑誌だけではなく、Women in New Yorkという都市型の女性像を描いた書物の中にも現れており、一般的に女権拡張運動家のイメージとして流通していたことが分かった。

この分析内容については、近く論文にまとめる予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）

①長妻由里子、「19 世紀アメリカとダゲレオタイプ：40 年代の特質」日本写真芸術学会、平成21年度年次大会研究発表会（平成21年6月13日）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
特になし。

６．研究組織
(1)研究代表者
長妻　由里子（NAGATSUMA　YURIKO）
高知女子大学・文化学部文化学科・准教授

研究者番号：５０３４７６６３